

南方熊楠は「猶太教の密教の曼陀羅」で

何を表現しようとしたか——セフィロトの樹との比較——

唐澤太輔

はじめに

一九〇二年三月二五日付の南方熊楠から土宜法龍へ宛てられた書簡^①の中に、いくつかの奇妙な図が描かれている。それらも南方は「猶太教の密教の曼陀羅」と呼んでいる。その内の一つはカルデア・ユダヤの宇宙構造図を模した図(図①)となっている。また彼は、この図①の横にユダヤの神秘思想・カバラのセフィロトの樹(図②)に酷似した図を描いている(図③^②)。さらに南方は、同日に土宜に対して「前刻齒匠へ之くに追られ、状文多少錯乱を免れざりし故、今又追加する所左の如し」(高山寺本、二六九頁)と述べ、再び書簡を送り、その中に図③を改良した図④を描いている。南方はこの頃、カバラの図像にかなり関心を寄せており、それらを吾宗である真言密教とミックさせながら自身の思想を独自に展開する道を模索していた。

複雑怪奇な図の中でも特に図③は錯綜しており、南方の説明も正直、言葉足らずである。図③には、苦集滅道(仏教の根本原理である「四諦」)の文字も見られる。しかし、南方はなぜそれらを書き込んだのか、その理由を特に説明していない。

本稿では、南方による一連の「猶太教の密教の曼陀羅」の中でも、改良・最終版とも言える図④(筆者作成の図④の簡略図も参照のこと)を取り上げる。これまでこの図に関する研究は少ない。奥山は図③と図④をまとめて「熊楠の生命の樹^③」と名付けており、他の論文でも、これらの図について触れ、セフィロトの樹に酷似していることを指摘している。しかし、南方の描いた図とセフィロトの樹の各要素がどのように対応しているのかについては言及していない。



図①

南方はこれらの図を構想した頃、神智学の提唱者マダム・プ
ラヴァツキー (Helena Petrovna Blavatsky) による大著『ヴェー
ルを剥がれたイシス』*Isis Unveiled: A Master-key to the Mys-
teries of Ancient Mysteries of Ancient and Modern Science and
Theology* Vol.1, 2 (Fifth thousand, L. W. Bouton, New York, 1878.
以下 Isis と略記。本稿における和訳は筆者による) を読んでい
た。⁽⁵⁾ この書籍の中には、セフィロトの樹の図そのものは掲載さ
れていないが、その要素の説明は、されてゐる、(主に Vol.2)。⁽⁶⁾ 南
方が図④を構想する際、この書籍が彼に影響を与えたことは間
違いない。現在明らかになっている彼の日記と所蔵書籍を見る
限り、南方が図を描く直前に読んだと思われるものの中で、セ
フィロトの樹について明らかに言及しているのはこの書籍だけ
である。

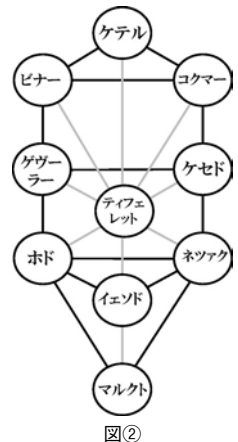
カバラの教理では、世界は十種類のセフィロト(単数形はセ
フィラー)を段階的に経て顕現するとされている。各セフィラ
ーは、神聖な諸力が発揮される領域とされている。

スフィロトの木は、幾何学的なマンダラであり、ケテル
(王冠) から人間の経験に最も近接した局面、相であるシ
エヒナーやマルフト(王国)へと下る神の霊の流出のヒ
エラルキーを表していた。⁽⁷⁾

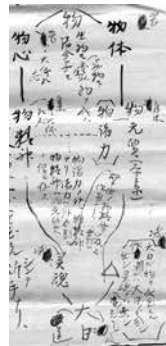
要するに、セフィロトの樹は、根源的な場から人間が普通に
知覚している世界がどのように現出するのか、その順序と関係
を描いたものである。それは、幾何学的なマンダラあるい

は宇宙の真理
を表現したビ
ジュアル・イ
メージと言え
る。南方は、

カバラと真言
密教とに通じ
合うものを明
らかに感じ取
っていた。以
下では、図④
とセフィロト
の樹の各要素
を比較し、そ
の共通点を見
出し、最終的
に彼が何を示
そうとしてい
たのかを考察
していく。



図②



図③



図④



図④の簡略図
(著者作成)

一 大日とケテル

【図④中の】霊魂は大日中心のものなり。然れども大日が

物体を現出する性質と作用とは集合靈魂（大日中心）（全部）にありて、一部靈魂（われわれ靈魂となりて大日中心に帰り、特に吾れ吾れ自箇の過去、現在、未來を記憶し出すとき）にはなし。故に無關係。（一九〇二年三月二五日、高山寺本、二六九頁、【内一筆者】）

図④の頂点には、南方によつて大日と描かれている。まず南方は、靈魂は大日如来の中に（内に）あるということを述べている。南方がここで示す大日とは、全てを包み込むいわば胎藏界大日如来のことである。一方、大日の中にあるとされる靈魂は、後で述べるように、智慧の象徴である金剛界大日如来に相当する。通常、金剛界と胎藏界は「金胎不二」つまり相即不離の關係とされ、上下關係も包含被包含關係もないのだが、南方はどうやら金剛界大日如来は胎藏界大日如来に包み込まれているという独特なイメージを持っていたようだ。例えばそれは、彼が「胎藏界大日中に金剛大日あり。その一部心が大日滅心（金剛大日中、心を去りし部分）の作用により物を生ず」（一九〇三年八月八日、往復書簡、三三三頁）等という言葉を残していることから分かる。

南方は「集合靈魂（大日中心）（全部）」と述べており、頂点に描かれている大日を集合靈魂と同じものとしている。即ち、個々の靈魂がその個性を失い集合し融合状態に還元されたものこそが、南方の記す大日（胎藏界大日如来）なのである。

南方の描く図④の大日の位置には、セフィロトの樹における

ケテル (Kether) が当てはまる。それは、人智を超えて最も高い聖性を備えた「王冠」、絶対無分節の存在そのものとされる。全てが生まれ帰還する場、つまり生も死も、自己も他者も、全てを包蔵する生命の土台こそケテルなのである。人智はそこに達することは到底できない。人間はそれを了解するのみである。ケテルについて、²⁶では「活動力・本源的な点・王冠」(26六頁)とされている。ケテルは何ものにも縛られない淵源なのである。それは、南方の言う大日と一致する。

二 靈魂とココマー

先述の書簡内で、南方は大日を集合靈魂とし、一部靈魂と區別していた。一部靈魂を、南方は「特に吾れ吾れ自箇の過去、現在、未來を記憶し出すとき」のものだと言う。全てが統一され対立も区別も無くなった根源的な場（集合靈魂あるいは胎藏界大日如来）では、過去・現在・未來という時間の矢は解消される。従つて、その一歩手前の一部靈魂の状態では、まだ辛うじてそれは残されており、深く記憶されていた事柄等を想起することが可能なのである。換言すると、それは時間觀念という最も原初の知が働く状態である。これを根源的な智慧の象徴としての金剛界大日如来の在り方と一致していると言つても過言ではないであろう。ややこしいことに、南方は、図④内において靈魂を集合靈魂と一部靈魂とに分けて描いていない。しかし、彼の説明から察するに、図④中の靈魂は、厳密には一部靈

魂、つまり無に帰す前の、辛うじて個（原初的な知）が残っている状態のことだと分かる。

南方が図④で記す靈魂の箇所には、セフィロトの樹では「知性」の象徴とされるコクマー（Chochmah）が当てはまる。

それ（ケテル）は、コクマーという男性的知性、男性的な能動的潛勢力を最初に生み出すことよって創造的仕事を行っている。（*S&S*、二六八頁）

ブラヴァツキーがこう述べるように、根源であるケテルから最初に流出したものがコクマーである。一方、先述のとおり南方は、知の象徴である金剛界大日如来を図④中で靈魂（文章中では一部靈魂）と述べており、これはコクマーと一致すると言える。

三 大日が物体を現出する性質と作用とビナー

大日が物体を現出する性質と作用、これは先述の「金剛大日中、心を去りし部分」という言葉からも推測できるように、時間観念を持つという原初的心性^①知を、大日から取り除いたものである。また南方が「大日が物体を現出する性質と作用とは集合靈魂（大日中心）（全部）にありて」と述べるように、一部靈魂とともにそれも集合靈魂（大日^②胎藏界大日如来）に含まれている。一方、南方は一部靈魂と大日が物体を現出する性質と作用は無関係であると言う。南方がここで意図したこと

ている両者は関係すら持つことではないことであろう。なぜなら、本来的に「関係」というものは、自他对立あるいは影響を与え合うものであり、その点において、根源的な両者においては未だ「他者」と呼べるものはないからである。

南方が図④で記す大日が物体を現出する性質と作用の箇所には、セフィロトの樹ではビナー（Binah）が当てはまる。ビナーは「理解」の象徴ともされるが、重要なのは「形の授与者」^③ともされていることである。*S&S*では、それは「女性的な受動的潛勢力」（*S&S*、二一三頁）と記されている。言うなれば、それは世界を創造するきっかけとなる源泉であり全てを産み出す女性性及びその作用の象徴なのである。これはまさに、南方の言う大日が物体を現出する性質と作用と一致する。

四 精神とケセド

南方は、図④において靈魂の下に精神と記している。この要素以降「熊楠の生命の樹」はかなり彼の独自の性が出ている。

精神の作用原子に加はるときは、物力生出す故に有關係也。（一九〇二年三月二十五日、高山寺本、二六九頁）

南方は、精神と原子が交わるとき、そこに物力が生じると言う。また別の箇所では、精神を「人体凝集に先ち身分^④まとめて身を作り維持する力」（同前書簡、高山寺本、二六五頁）とも述べている。つまり彼は、精神は身体ができる以前に既にあるものであり、この精神によって身体ができ、またそれは精神に

よって維持されるものと考えていたのである。

セフィロトの樹では、図④の精神の位置に「慈悲」「莊嚴」を象徴するケセド (Chesed) が当てはまる。ケセドに関するブラヴァツキーの言葉は少ない。「男性的な能動的潜勢力」(Isis 二二三頁) と述べるだけである。別の解説書では、ケセドは「愛する父、保護者、維持する者」ともされている。この中で特に「維持する者」は、先述したように、南方が、人体という形あるものに先立って人体をまとめ上げ維持する力を精神としていることに一致する。ケセドは「神的『有』のエネルギーは存在すべきすべてのものに存在を与える」ものとされることもある。つまり、存在者に存在を与え、存在者として、あらゆるものを維持するエネルギーとなるものがケセドなのである。

ここで留意すべきは、このような説明は『』には見られないことである。南方が図④を構想した際に参照した書籍が『』だけだとしたら、このケセドと精神との「維持する」という点の一致は偶然であろうか。あるいは彼はカバラに関する他の書物を読んでいたのであるか。この点に関しては、現在明らかになっている資料だけでは十分に知ることはできない。

五 原子とゲヴラー

南方は、図④を描く二日前の土宜宛書簡で原子について以下のような事柄を述べている。

吾れ吾れ大日の原子は何れも大日の全体に則りて、或は大

に或は小に大日の形を成出するを得。(一九〇二年三月二三日、高山寺本、二五六頁)

つまり、南方の考える原子とは、大日から流出したものである限りにおいて、個でありながらもその中には根源である大日の全て(経歴)が含まれているものなのである。南方は、原子は物を構成する最小単位でありながらも、その中には、最大いや無限である大日がセットされていると考えていた。

セフィロトの樹では、図④の原子の位置にゲヴラー (Gevurah) を当てはめることができる。ケセド同様、ゲヴラーに関して Isis 内の説明は少なく「女性的な受動的潜勢力」(Isis 二二三頁) と書かれている程度である。ケセドが「維持する者」であるのに対して、ゲヴラーは「破壊者」とされることがある。またそれは「まだそれぞれ一定の自性を得ていなかったすべての存在可能性が、ここではじめてはつきり識別され、厳正な基準による存在範型となる」ものでもある¹³。南方の記す原子は、ゲヴラーのように破壊者としての意味を持つのであろうか。彼の文章を精査しても、原子がそのような力を持つものであることは見えてこない。ただ、自性を得た原初的な存在範型という点では、南方の考える物を構成する最小単位としての原子はゲヴラーと一致する。

六 有関係とタイプレット

四で示したとおり、南方は、精神と原子を有関係だと述べて

いる。彼は両者を対概念として捉えていた。つまり精神があるためには原子があり、原子があるためには精神があるということである。それぞれ単独で存在することはなく、特に南方は精神が原子に作用を与える（原子によって作用させられると言っても良い）とき、そこには、何らかの物力が生じると述べている。物力、即ち物が動き発電したり発光したりする力のことである。要するに、精神によって原子が観測されるとき初めて原子の運動つまり物力は決定されるということであろう。それまで物力は未確定なのである。ここには現代物理学の観測者問題に関わる事柄も示唆されているように思われる。

図④の有関係の位置には、ティフェレット (Tifereth) が当てはまる。それはケセドとゲヴラーの間であり、両者の対立を中和させるものとされている。ブラヴァツキーは、ティフェレットを美であり太陽でもあるとする (『秘蔵』二一三頁参照)。それは、対立項に平等に浸透する調和的な美なのである。

南方が有関係と書いたのは、精神と原子は対立しながら関係し合っていることを示すためであった。それは、常に関係せざるを得ない「関係」のことである。両者は、お互いの純粋な反対者、とも言うべきもの同士なのである。このような事柄を鑑みると、南方がこの位置に有関係と記したことは、ティフェレットの作用を意識してのことだったとも考えられる。

七 物心とネツアク

扱精神が原子にふれて物心と化し、物心が物体と合して物界を現す。(一九〇二年三月二五日、高山寺本、二二六八頁)

南方は、精神は原子と触れ合うことで物心を生じさせると言う。精神と原子とは有関係である以上、精神はそれ単独で物心を生み出すことはなく、必ず原子の作用が必要になるのだ。

南方がここで示す物心の読み方は「ぶっしん」だと思われるが、その意味するところは「ものごころ」だと思われる。物心——つまり、臍気ながら理解や判断ができる心のことである。南方は、この物心に関して以下の様にも述べている。

人心も物心の一種、特に秀英なるものと見るべし。人心の外に物心ありやと問んに、上等動物は勿論微虫、植物にも物心あるは、多少の意識及所謂動植の活力あるにて知るべし。(前掲書簡、二二六九頁)

南方は、人間の心(人心)も物心から生じたものであるが、それは物心の中でも特に秀でたものであると言う。この物心は、動植物の生存に根本的に関わる事柄(例えば重力、引力、抵抗力等に反応すること)である。従ってそれは、端的に根源的な生きる力(活力)と言っても良い。

セフィロトの樹では、図④の物心の位置に「勝利」や「この世界の自然の成長する諸力」を象徴するネツアク (Nesach) が当てはまる。またその「創造的エネルギー」は、より物質に近く

なりながらも、まだ比較的自由に拡大しようとする流動的な状態⁽¹⁵⁾にあるものである。一方 Isis では、ネツアクに関して「男性的な潜勢力」(Isis 二二三頁)と記されているだけであり「自然の成長する諸力」等という表現は見られない。しかし南方の示す物心は、先述のとおり自然が成長する力、自由に拡大する余地が残っている流動的なものだったと考えられる。

八 物体とホド

次に、物体であるが、南方は、以下の様に述べている。

原子は精神とふれて物力を生じ、物体を顕出す。〔中略〕

ここにいひ置くは、物にも生物と非生物あり。生物は物心作用勝れ、非生物は物力のはたらし勝るることなり。(一)

九〇二年三月二十五日、高山寺本、二六九頁)

原子と精神が触れ合うことで、具体的に目に見える物体が生じる。南方は、そこには物力が働いていると言う。非生物は物心の作用が見えなくとも、決して全くないわけではない。非生物は物力の働きが前面に出ている場合が多いだけなのである。

セフィロトの樹では、図④の物体の位置にホド (Hod) が当てはまる。「神の栄光」「尊厳」を意味するホドと物体との対応関係を考えることは難しい。そもそも、Isis では、それを「女性的な受動的潜勢力」(Isis 二二三頁)と述べるのみで、ほとんど説明されていない。しかし、興味深いことは、他の書物でこのホドは「形を明確に組織化する天球」とされることもある

点である。またそれはネツアクの「創造的力の横溢を受け止めて様々に形成し変化させる」ものとも言われる。勿論、形成し変化させるためには、物体という「形」が必要である。そして南方がここで言う物体とは、生物・非生物問わず、変化しながら形を明確に表したものであり、そのような点ではホドの内容との一致が見られる。

九 有関係とイエソード

南方は、物心と物体を線で結び、その間に有関係と記している。そして、次のように述べている。

物心と物体に至ては密着して不可離故に大関係あり。(一)

九〇二年三月二十五日、高山寺本、二六九頁)

物心と物体という物界を成り立たせている根本的なもの同士は対概念であり、相即不離である。物心だけのものや物体だけのものは存在しない。南方は、たとえば非生物であっても多少の物心があり、ただそれは人間や動物のような生物に比べると分かりにくいだけだと考えていた。そもそも物体を物体として我々が知るためには物心が必要であり、その物心を物心たらしめているのは、純粹にその反対である物体である。そのような意味でも、両者を簡単に切り離すことなどできないのである。

セフィロトの樹では、図④の有関係の位置にイエソード (Yesod) が当てはまる。これは、ネツアクとホドの間にあり、両者の対立を中和させるものだと考えられている。Isis は、そ

れは「基礎、偉大な生ける神エル・カイ」(213頁)とされている。本来、不死であるはずの神が「生ける神」とは、一体どういうことか。——生ける神とは、まさに死と生が交わる、あるいは反対同士とされる両極を合わせた存在なのである。このイエソードは「心と物の両方の性質をもつ特殊な実体の天球¹⁸」ともされる。カバラでは、心と物とが交わる場合は、顕現した世界において根幹とされる。一方南方も、心と物との交わりを、特に「事」と表現し、自身の学問の基礎としていた(一八九三年十二月二四日、往復書簡、四六―四七頁他)。南方は常に、心と物の中間に生ずるダイナミックな世界を捉えようとしていた。それは彼が、民俗学においては西洋と東洋の接点、生物学においては動物と植物の中間と言われる粘菌を熱心に研究していたことから知ることができる。

十 物とマルクト

南方は、有関係のすぐ下に物と書いている。これは顕現した物界、物質世界のことである。いわゆる我々の知る物界は、物と物体から成っている。そこには生物と非生物が存在する。南方は、これらをまとめて物と記しているのだ。南方は、全てのエレメントが収束する一点を物としたのである。

何となれば、大日に帰して、無尽無究の大宇宙の大宇宙のまだ大宇宙を包蔵する大宇宙を、たとえば顕微鏡一台買うてだに一生見て楽しむところ尽きず、そのごとく楽しむと

ころ尽きざればなり。(一九〇三年七月十八日、往復書簡、三〇一頁)

この南方の言葉からも分かるように、彼は、明らかに一個物の中に含まれる大宇宙(全て)を見ていた。それは、いわば「一即多」「多即一」の境位である。

セフィロトの樹では、図④の物の位置にマルクト(Malkhut)が配置されている。それは端的に物質世界を表すものとされ「王国」とも言われる。マルクトとは、他の全てのセフィロトの影響力と流出を受け取った物理顕現の世界である。ブラヴァツキーも「他のセフィラーの全てをその中に含んでいる」と述べている(222―224頁参照)。またそれは、セフィロトの樹においては必ず一番下に描かれるものである。一方南方も、大日から流出した靈魂、大日が物体を現出する性質と作用、精神、原子、物心、物体が全て収束した一点を物としている。以上から、マルクトと物は一致すると言って良い。

まとめ

カバラにおけるセフィロトの樹は、宇宙の創造に関する連続したプロセスを図式化したものである。そして南方も図④で、大日から全てが流出し、物質的世界が現れるプロセスを、吾宗である真言密教の用語等を駆使しながら表現したのである。

本稿では、南方による「熊楠の生命の樹」(図④)とカバラにおけるセフィロトの樹のそれぞれのエレメントについて比較

構造分析を行った。そして、南方は図④において、セフィロトの樹の形だけではなく個々の内容も踏襲していることが分かった。ただし、図④の要素が各セフィラーの内容と全て完全に一致しているわけではなく、そこには南方の独自性もかなり見られた。また、ブラヴァツキーは、セフィロトの樹の右側を男性原理、左側を女性原理としているのに対して、南方は右側を物質性、左側を精神性としている点も独特である。このような相違は、南方によるセフィロトの樹の理解不足から生じたものなのか、理解した上でのカスタマイズなのか。あるいは、*magick*以外の著作からの影響なのか。判断材料は未だ不足していると言わざるを得ない。今後、日記、蔵書のみならず、彼が長年講読していた*Nature*等の雑誌記事も調査する必要がある。

本研究は、日本学術振興会科研究費若手研究「南方熊楠と明恵の夢に関するデータベース作成と比較思想研究」(18K12608)によるものである。

- (1) 南方熊楠「高山寺蔵 南方熊楠書翰——土宜法龍宛一八九三—一九二二」奥山直司・雲藤等・神田英昭編、藤原書店、二〇一〇年(高山寺本と略記)。本稿における図①③④は、梅尾山高山寺所蔵。本稿で示す南方による書簡は全て土宜に宛てられたものである。
- (2) 橋爪博幸「H・P・ブラヴァツキーと南方熊楠の宇宙図」志村真幸編『異端者たちのイギリス』共和館、二〇一六年参照。
- (3) 松居竜五・田村義也『南方熊楠大事典』勉誠出版、二〇一二年、三一頁。
- (4) 奥山直司「南方熊楠における死生観と安心」高田信良編『宗教における死生観と超越』方丈堂出版、二〇一三年、一五八頁。

- (5) 南方の日記からは、一九〇一年六月—七月にかけて、*magick*を熱心に読んでいたことが分かる(南方熊楠『南方熊楠日記』第二巻、長谷川興蔵校訂、八坂書房、一九八七年)。
- (6) 本稿では、*magick*と略記した。
- (7) Eilan Frankel「図説 ユダヤ・シンボル事典」木村光二訳、悠書館、二〇一五年、一五一頁。
- (8) 井筒俊彦は「カッパラーの『セフィロト』構造体も、明らかに『セフィロト』マンドラである」と述べている(井筒俊彦『意識と本質——精神的東洋を求めて——』岩波書店、一九八三年、二六七頁)。
- (9) 南方熊楠・土宜法龍『南方熊楠・土宜法龍往復書簡』飯倉照平・長谷川興蔵編、八坂書房、一九九〇年(往復書簡と略記)。
- (10) Dion Fortune『神秘のカバラ』(一九三五年)大沼忠弘訳、国書刊行会、一九九四年、三二〇頁。
- (11) 同書、二二二頁。
- (12) 井筒、前掲書、二二七頁。
- (13) 同書、二七四頁。
- (14) Gershon G. Solem『ユダヤ神秘主義』(一九八五年)山下肇・石丸昭二・井ノ川清・西脇征嘉訳、法政大学出版社、一九八五年、二八〇頁。
- (15) 同書、二八〇頁。
- (16) Fortune、前掲書、三二六頁。
- (17) 井筒、前掲書、二七六頁。
- (18) Fortune、前掲書、三三八頁。
- (19) Chic Cicero, Sandra Taatha Cicero『現代魔術の源流』黄金の夜明け団「入門」(二〇〇三年)江口之隆訳、ヒカルランド、二〇一七年、二三四頁参照。

(からさわ・たいすけ、哲学・南方熊楠研究、龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)